「解釈」の主題と主体

—フッセル『危機』書を軸として—

荒　木　正　見

序。

筆者は先にヘーゲル (Hegel, G.W.F)『精神現象学』の分析において[(1)]、ヘーゲルの「現象学」の方法を明らかにした。小論はその際比較すべきであると述べたフッセル (Husserl, E．) の「現象学」の方法に対するひとつのアプローチである。厳密な解釈学の方法を企図する筆者にとってこの双方を、意識構造の差異に絞って比較することはきわめて興味あることである。とりわけフッセルの方法は、今日様々に語られる広義の解釈学（ハイデッガー、サルトルはもちろんであるが、ロラン・バルト等のフランスのフォルマリスト達、そしてガダマーやロムバッハなどを含む）の基盤を為している。これらの点を前提として、極めて限られた紙面の小論ではすぐさまヘーゲルとの比較をするのではなく、今日の解釈学がその出発点とする（例えばガダマーがそうするように）フッセルの所謂『危機』書に[(2)]、分析の軸を定めてみたい。なお、筆者の問題意識は解釈学の方法にある。従って思考の流れにはフッセルの叙述に対して解釈学的萌芽を読み取っていきたいという意図が明確に現れる。おそらくフッセル自身はそれほど強く解釈の方法にこだわるつもりはなかったと思われるが今日的問題意識からは方法を表面化した方がいわば歴史を遡行する形でフッセルの学的意図を読み取り易いと判断したものである。

1．解釈学の基底

解釈学は何故成立するのか、または如何にして成立するのか。われわれのこの問はあらゆる客観的実在に対する疑いから発生する。それは『危機』書において述べられる実証主義的学問に対する危機意識と同じ根拠に基づくものである。

この危機状況はフッセルによればデカルトの内に潜む対立する二面に典型

的に現われているとされる。その二面とは客観主義 (Objektivismus) と超越論主義 (Transzendentalismus) である。ここで語られる客観主義は、「経験によって自明的に前以て与えられている世界を基盤にして、その“客観的真理”を問い世界にとって無条件に妥当するもの、つまりすべての理性的なものにとって妥当するものを、即ち世界がそれ自体において何であるかを問う。」[3]のであり、超越論主義は、「前以て与えられている生活世界の存在の意味は主観的に形成されたものであり、経験する生すなわち学以前の生の所産である。その生において世界の意味と存在妥当とが構築されるが、その都度の世界はその都度の経験に現実に妥当するものである。」[4]と述べられることに尽きるであろう。そして、デカルトにおいては前者が「普遍数学 (Universalmathematik)」としての哲学の構想すなわち徹底した論理的厳密さによって構築された哲学体系の構想を意味し、後者が所謂「われ思う (ego cogito) への還帰を意味するのはいうまでもない。

フッセルが前者を否定し後者へと移行するその思惟の底に解釈の持つ宿命的な限界を重ねることができる。その限界とは、解釈は所詮本来無限の豊かさを内包する解釈対象ＡをＡ以外の一表象Ｂに置き換える作業にほかならないということである。そして、このＢはＢである限りにおいてはいくらその内部に論理的厳密さを有していてもＡ以外のものであることから逃れることはできないのである。

従ってデカルトのコギトも本来無限の広がりと豊かさを持つものとして提起されながら、客観主義的な衝動によって短絡的に「コギトの学＝心理学」として諸科学と並列され、限定された境界を持つことになったとされる。

更にフッセルとデカルトとの決定的分れ目は次の点にあるとされる。すなわち上記のようにデカルトはコギトに主題的客観性を与え、心理学として考えようとしたが、フッセルはそのコギトを原点としてのすべての対象についての懐疑に立ち帰って、このコギトはすべての区別もしくはすべての対象が「構成」される絶対的自我 (ego) もしくは純粋自我であるとした点である。[5]

ここに至って、およそ解釈というものは成り立たないのではないかという懸念が生じることになる。つまり、解釈を試みようとしてどのような説明を加えようとしても、所詮それは純粋自我という絶対的な、しかも主観的な地平に於ける構成物にすぎないではないか、という懸念である。この懸念は一見もっともであるように見えるが、それにはひとつのロマンチックな思いが

込められていることが解る。それは、解釈とはあたかも神の目によるがごとき客観を瞬時に開いて見せるものでなければならないという思いである。

例えどうであれ解釈の目標が客観に向けられていることは否定できない。しかし、そもそものデカルト的懐疑は眼前の客観らしさに対して向けられたのであった。また、無時間的客観つまり超越そのものである客観を即座に想定することは上で批判された客観主義にほかならない。

では上の懸念を解消することはできるのか。その鍵は「超越論的 (transzendental)」という語にある。　フッセルは「超越論的」という語を最広義にとるひとりである。それはこれまで述べられてきたように純粋自我を絶対的地平として開示するところにある。しかし、この地平は静的に引かれた単純な一本の線ではない。もしそうであれば先の悪しき客観主義に陥ってしまう。あくまですべての現象が現象し続ける運動を内包する地平である。やや先回りになるが、この運動の概念をここで導入することは、我々がいまフッセル現象学にそくして考えようとしている解釈の新しい可能性を拓くものである。つまり客観を瞬時に開いて見せるのではない、開きつつある運動として示していくことにひとつの可能性を見ようとするのである。

さて、現象し続ける運動は現実には現象の多様性として示される。この多様性こそが解釈の対象となることはいうまでもない。しかもこの多様性が純粋自我において発生しているのであるから純粋自我はその発生の原因を担っていることになる。その発生の原因としてカントの超越論主義では主観的カテゴリーを想定した。しかしフッセルはこのカントの学問態度にも「問われることのない前提の基盤」があるとする。(6) つまり、カントの「超越論的形式を与える主観性や、感性、悟性などの超越論的能作、また超越論的統覚という自我の機能」等々にしても、(7) 哲学者が生活し、諸科学が成立している日常世界の存在があらかじめ存在するものとして前提されている。

この前提されている日常世界を基にして考えれば、カントの超越論的思考の場もまたひとつの領域に限定された学問であることになる。

ではここで基底的に考えられている日常世界はカントの轍を踏んで更に前提とされる世界を持つことはないのであろうか。

この点についてのフッセルの基本的立場は自明性への収斂である。フッセルはきわめて単純にそれがすべての限界を超えているかのように述べるが、このことはまた次のように考えることもできよう。ここで語られる日常世界

はもはや学問ではない。それについて何か解釈し始めるところに学問がはじまる。このような学問とそれ以外の接点はひとつには学問の地平であることは間違いない。そして、学問は何にせよ特定の方法論のもとで定式化されるという宿命がある。この定式化が生まれる直前の地平、日常生活はこの意味において最基底の無前提性を持つ。

しかし、更に問題は残る。我々はその地平から出て学を構築しなければならない。小論のテーマからいえば我々はそこに再び世界解釈を開始しなければならないのである。見通し的にフッセルを引用すれば「すべての思考の自明性 (Selbstverständlichen) つまりすべての生の目的や能作におけるすべての生活行為 (Lebenstätigkeit) が前提としている自明性へと問いかけ、その存在の意味や妥当の意味を一貫して問いつつ、すべての精神的な能作を貫いている意味連関と妥当連関の完全な統一に気付く」[8]ことが同時に日常生活を哲学の問題領域に含むことになるのである。

今やひとつの地平が存在する。それは日常世界と学問世界とを峻別する地平である。学問世界から見ればこの地平は最も根底的な地平である。その地平の背後には学問は存在しない。

フッセルの思考を図式的に述べてしまえばこのようになるが、しかしそこにはひとつの問題点が指摘される。

すなわちこれまでの思考の流れに沿って言えば、この地平を基底にして生活世界を解釈し、学問世界を構築することは何にせよ特定の問題領域を設定することになり、それは先の根底的地平とは異る地平を作り再び悪しき客観主義に陥ることにならないだろうか。

この問に対するフッセルの立場からの解答は次のように読みとることができる。

フッセル前期から一貫してとり続けている学的態度は現象学的還元 (phänomenologishe Reduktion) と呼ばれる。現象学的還元はまずすべての実在に関する超越的判断を括弧に入れて、すべてを主観的現象であるとする（判断中止）ことに開始される。この現象の地平が先に述べた純粋自我である。つまりフッセルはこの現象の地平と、学問世界と生活世界とを分ける地平とを重ね合わせることで、地平を立体的にかつ柔軟に捉えようとする。現象学的還元はやはり解釈としての成果を期待されるわけであるから、何らかの意味で客観的判断を下さなければならない。現象を遡行すれば、その現象が個

人的な主観によって構成されていることの奥に間（共同）主観によって構成されていることに気づく。フッセルが生活世界を学問世界へと解釈し直すということは、このように必然的にかかわっている主観の層とのかかわりとして記さなければならないのである。このことは常に先に述べた地平そのものを問題とすることを意味している。そして、これがカントと異るのは、その地平には常に主観的作用とその対象との一体的相関関係が見られるという点であるとされる。

しかし、これにもなお問題は残る。上のフッセル的解釈からなおかつフッセルがカントを批判したのと同じことをしてしまうのではないか、という疑問が生じるからである。

いかに主観的作用との相関関係として生活世界を解釈したとしても、そこに浮び上がってくるものは無限の混沌たる世界の一部に制限を加え、特定の領野を限定してしまうことにならないのであろうか。

ここに至って我々はこれまでの考察の論理的空隙に気づくことになる。それは現象の地平と、学問世界と生活世界とを分ける地平を単に静的な図式として重ね合わせた点である。構造は静止しているわけではないし、未だ整合的に述べられているわけでもない。この点が次の考察の要点になる。

2．解釈という運動

比較されるべき二つの地平がある。ひとつは現象の地平であり、他のひとつは生活世界と学問的世界とを峻別する地平すなわち学問の地平である。相互に異った意味を持つ二つの地平は先に考えてきた重なりを持ち得るのであろうか。まずその点から検証してみよう。

現象の地平、純粋自我は現象学的還元という学的操作と相関関係を保ちながらも、事実の根底を意味していた。その意味では生活世界の根底でもあるといえるのである。しかしまた一方で生活世界は客観的対象への信頼の世界でもあった。つまり、現象の地平が生活世界の根底でもあると「語ること」そのことが、学問的地平の開示を意味するのである。ここには生活世界における客観性への信頼が消滅しているからである。

とりあえず概念的現象の上から二つの地平を整合的に組合わせれば上のように示される。ではこのことは何を意味し、また我々に何を要求するのであろうか。

現象の地平が生活世界の根底でもあると「語ること」、これは反省的意識(das reflektierende Bewußtsein)の行為である。反省的意識とは意識の現実的な働きを第三者的に観察する意識である。これまでの考察では意識の現実的な働きを現象の地平として捉えてきた。この地平においてはすでに運動が存在した。つまり、デカルトにしろ、カントにしろ、この運動に基づく多様な現象から遡行することでそれぞれの主観的認識構造を組み立てることができたのであった。しかし、それが何らかの不備によって先に挙げたような問題の発生をみたのである。まずこの問題の解決は論理的にはどのように導かれるのであろうか。今や現象の地平を問題にすることはできない。それについてはすでに考察された。となると、問題は学問の地平に移行する。

学問の地平、すなわち生活世界と学問世界とを区別する地平はどのようにして成立するのであろうか。それは生活世界に対する懐疑、つまり反省的意識の成立と同時である。生活世界の構造や意味や存在を問い始めるところに学問世界は成立するし、このように問い始めるのは反省的意識である。更に意識であれば当然運動を持つ。その運動は意識一般の運動であるから、先に現象学的地平について述べた運動と同じ運動形式を持つ。しかし、あくまでこの運動は学問的地平そのものの運動であって、同じ運動形式だからといって単純に両者を重ね合わせてはならない。さて、今や問題は地平の運動に向けられる。この運動の存在、およびその意味について事実の側から語られなければならない。

この場合事実とは生活世界そのものである。生活世界と学問世界とが接している地平を想定してみる。生活世界は我々が自由濶達に生きている世界であり、反省的に言えばまたその根底に現象の地平を有するのであるから、それ自体無限の運動を内包している世界である。その運動を学問世界に捉え直す場合は二通りある。ひとつは運動を止めてしまう場合である。その場合、生活世界の運動は認識の諸形式という構造の内部に存在するにすぎず、もはや学問世界の問題には上り得ない。しかしこのことには重大な欠陥が含まれる。それは次の場合、つまり、運動を運動として取り扱う場合と比較すれば分り易い。この場合の運動はほかならぬ無限の知の開示である。無限なものの生成の運動を止めるには、その運動の仕方を述べることで、その内容の発生に目をつぶることが必要である。もし根底まで知られた内容であればそれはあたかも引出しに物をしまってラベルを貼っておくようにうまく収まるで

あろう。しかし、根底が無限つまり無知に向かって開いている場合、新たに現れるものによってはそのラベルつまり解釈を変更しなければならない事態が生じるであろう。もし運動を運動として捉えておけば、このラベルつまり解釈の変更は当然のことである。むしろ変更し続ける事態の諸連関を記述することが、解釈の活性化になるのである。かくして、学問世界の地平はそれ自体運動する。それは解釈し続けることという運動である。解釈は現象学的地平の運動を解釈するのであるし、それは主観性との単なる相関関係としてではなく、まさに運動しつつある主観性との関係として記されなければならない。

ここでフッセルを顧みる。フッセルは上の論理的展開をむしろ具体的な学問的方法の提示をしていくことで叙述する。

フッセルはまず「デカルトの言い方に従えば」と前置きして、我々の考察（解釈）の手懸りとして、「自我 (ego) ― 意識作用 (cogito) ― 意識対象 (cogitatum)」という三項を分析の為の視線の方向 (Blickrichtung) であるとする。[9] そのそれぞれに現象学的還元が遂行されなければならないが、フッセルはそれをデカルトが「自我」から考察し始めたとは反対に、「意識対象」すなわち「生活世界」からとりかかろうとする。「生活世界」こそが最も基底的な場であることはこれまでの考察から明らかである。そして「意識作用」や「自我」はこの「生活世界」に基盤を置く考察の視線の方向としてとりあげられなければならない。このように生活世界が考察されることになるが、ここに至って先の考察で我々が学問の地平と反省的意識とを重ね合わせて考察したようにフッセルは生活世界を考察する行為者としての「われわれ」について考察することになる。

まずフッセルの問題は次のように示される。「世界を構成するものであり、しかるにまた世界そのものに組み入れられている主観性としての人間性」[10]、生活世界を解釈するという立場は、しかも、生活世界を主観性との関わりとして解釈しなければならないという立場はこのような二律背反的な人間性を考察することになる。

しかしフッセルにおいてこの二律背反は「現象学的還元」の概念を媒介にして解かれることになる。「世界を構成するもの」としての自我は、当面ひとりの哲学者の特殊な主観性に依って述べられる。しかし、その主観性は解釈しつづける主観性である。つまり、単なる静止的な図式として捉えるので

はなく、あくまで運動し続ける主観性の構造として捉え直さねばならない。この運動はまた現象学的還元と重ね合わされている運動でもあった。すなわち、客観らしく見えるものが主観を超越した存在であるということに対してそのような判断を中止したことはまず特殊な主観性を排して間主観的判断へと至る突破口であった。更にその判断は指向性に従って（或いは直観的に、或いは思弁的に）、本質的判断へと進む。（この箇所は前期フッセルでは「イデア的」とまで述べられる。[11]）ここに至って判断は間主観的性格を得ていると言える。もちろんこのことはどこかで目的を達成し、停止した、あるいは停止するというものではない。現象は未知へ向かって無限に開かれるべきものであるし、現象概念を媒介にして述べられる「世界構成をする自我」とて例外ではない。未知へ向かって無限に開かれる現象と重ね合わされる解釈し続ける主観は、このことでたしかに世界構成をするのであるが、実は構成の運動をし続けているのであり、その限りにおいて無限の深奥を志向しているのであるから、間主観的判断を導き続け得る。

この運動を反対の側面から見れば、完遂され得ない運動の遂行者たる「世界そのものに組み入れられている自我」が見えてくる。もとよりここで記される「世界」は物質的世界に限られない。敢えて言うならば「無限」である。つまり、先の「世界構成をする自我」が世界構成をし続ける現象の地平の奥に連続的に広がる「無限」である。そして、世界構成をし続け、また学問的に解釈し続ければするほど、世界は客観的性格を帯びて現象し続けるように見える。

今やこの二律背反は次のような研究課題を残して整合したといえる。その研究課題とはまさに二律背反の両項が結び合わされた接点、つまり「自我とその超越論的な機能と能作」[12]の研究である。繰り返して言うことになるがそれは心理学を意味するものではない。あくまで生活世界全体と意識主観との相互関係の中で解釈され続けなければならないのである。

結び。

かくして、我々の視点からフッセルの叙述を分析したことになる。明らかになってきたのは我々が企図する「解釈」の主題を、フッセルは「生活世界」と呼んだこと、そしてその「生活世界」は「解釈」の主体たる意識（主観）と一体的に絡み合った構造をしているということであった。

もちろん先にも述べたように問題はこれで終ったわけではない。ヘーゲルの「現象学」の方法との比較が必要なのはいうまでもないし、フッセルの解釈の方法が歴史的に展開していく必然性を追わねばならない。これらが今後の課題となろう。　(1986．1，未完)

註

(1) 拙論：「経験する意識の構造」(『理想』第605号所収。理想社、1983)
(2) Edmund Husserl: "Die Krisis der Europäischen Wissenschaften und die Transzendentale Phänomenologie"
(Husseriana Bd. Ⅵ, Martinus Nijhoff, 1976)
(3) ibid. §14
(4) ibid. §14
(5) ibid. §19
(6) ibid. §28
(7) ibid. §28
(8) ibid. §29
(9) ibid. §50
(10) ibid. §54
(11) Edmund Husserl: "Logische Untersuchungen"
Zweiter Bd. I. Teil (Max Niemeyer, 1968), S.96-105, など。
(12) (2)と同書。§54